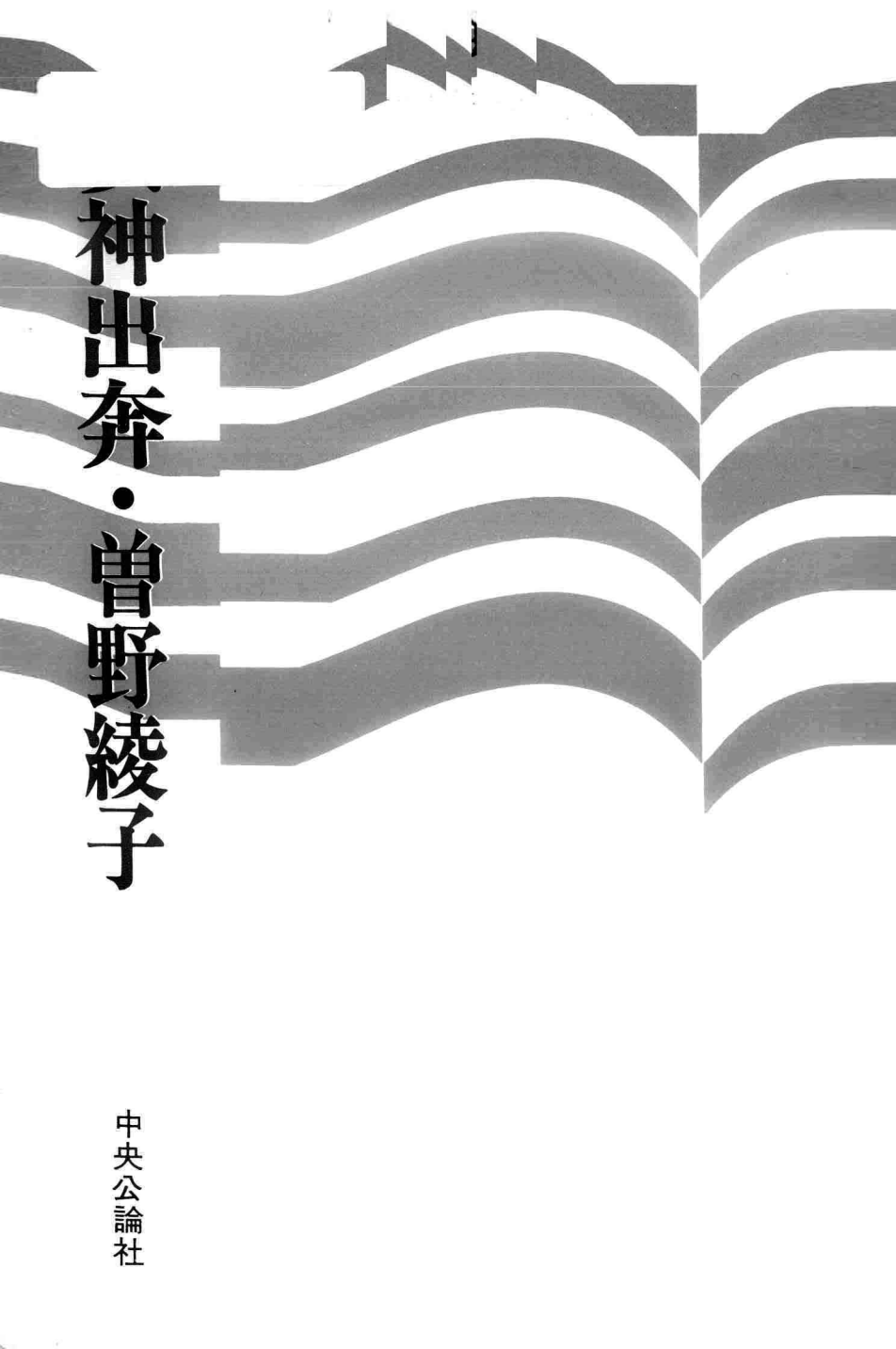


曾野綾子

女神出奔

「女神出奔」
「女神出奔」



神出奔・曾野綾子

中央公論社

新裝版

女神出奔

昭和四十八年九月五日印刷
昭和四十八年九月十五日發行

著者 曾野綾子

發行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

發行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一

電話(561)五九二一(代)

振替口座東京三四

定価五六〇円

©一九七三
検印廃止

女神出奔

第一章 陋屋の女

1

その日、楠田昇は勤め先の帝都火災を休んだ。昇はアパートの管理人の小母さんに、会社に電話をかけて、昨夜から少し体の具合が悪いから休む、と言ってくれ、と頼んだ。

「楠田さんも案外だね。朝帰りをしときながら病気だなんて隅におけないねえ」と小母さんは彼の顔を見て笑った。

「違いますよ。昨日、山で食あたりをして、動けなくなったから、しかたなくて宿屋に泊っちゃまったんですよ」

昇は言い訳をしたが、小母さんは自分一人の仮定を楽しんでいて、とうてい彼の言葉を信じてくれそうになかった。確かに彼は、今朝になってから、アパートへ帰って来たのだ。

昨日、彼は朝九時頃までとっぷりと眠って、日曜日の気楽さをタンノウしてから、ふと思いついて、ハイキング・コースのS岳へ出かけた。

楠田は気が小さいから、本格的な山のぼりには興味が無い。谷川岳で死ぬ青年たちにも同情はなかった。こんなに皆が山へ行く時に敢えて自分も行こうというようなのを、本当のミハー族というのだ。

楠田がなぜひとりで野や山を歩きまわるかといえば、それは、自分の周囲の人間の大半を好いていないからであった。楠田は自分が世の中に対して常に不遜な気持を持っているということを充分に意識していた。不遜といっても、それは普通の人間が考えるような世俗的なこととは違う。楠田はようやく大会社の部長までになった父親の三人息子の次男に生まれた。両親は自分たち二人が暮すには困らないが、生きているうちから三人の息子に、まとまった金をくれるほどの身分ではない。しかし楠田は健康で、人並みな能力を持っていたので、親からゆずり受ける財産を期待しえないことはむしろ気が楽なくらいだった。健康だから、もう四五年も戦争が長びいたら特攻隊のくじをひいたかも知れないという恐れはある。しかし戦後の混乱期の中に大きくなって浪人もせずに一流大学を出ていけば、何としてでも生きていける、という自信がこの二十八歳の青年の体にはみなぎっている。

とりわけ美男とはいえないが、楠田は背が高かった。鼻も眼も、あるべきところに正当についており、額はことに秀でて男らしかった。女たちは狭い額の男をきらうのだろうか。楠田の額は、男らしいのみならず、高貴さをもつ額だといった女さえる。高貴？ 何が……と楠田は苦笑した。自分は高貴の生まれではない。平凡さ、という絶対の強みをもった土壌の上に成長して来た雑草である。

楠田はひとりになるために山に行った。山へ行って、たったひとり、自分のような気持は誰にもわからないのだ、という思いをかみしめるためである。ひとにわかってもらえないので淋しく行くのではない。この自分を、そうそうたやすく、他人に理解されてたまるものか。

男たちの大半は楠田からみれば滑稽であり、女の殆んどは、憐れだった。男の中で楠田の手に及ばないのは変人といわれているような性格であった。職場の中での楠田は変人ではない。むしろ甚だ常識的な物わりのいい青年として通っている。たったひとり山の中を歩きながら、毎日の生活の中にわりこんで来る周囲の人間たちにもけるあらん限りの悪態と憎悪を、心ひそかにとり出してみて、再びそれを味わってみるために山へ来ているのに、人々は、彼の山あるきを「趣味」などというのだった。

「趣味」！ 何という生ぬるいいかげんな言葉だろう。趣味というのは、お道楽という言葉と同義語と思っていいたのか？ それなのに趣味でもって、教養をたかめる、などと、本に書いてあったり、ラジオが喋っていたりするのをきくと、楠田は正気の沙汰なのだろうか、と腹だたしくなるのであった。趣味は決して教養を高めたりはしない。趣味は人々を楽しませるだけだ。

ところで、昨日彼が辿った山歩きのコースだが、これは一応ハイキングのための道ということにはなっているが、休日でも殆んどこむということはない。世の中の人間は浅はかなのか、ハイキングというひとの行くところにはばかり行きたがるようにみえる。それほど人並みになりたいのか、と楠田は皮肉に思うのであった。楠田は断じて人並みになりたくない。

駅を下りると、山がせまってみえた。山がせまっている景色が楠田は好きだった。心にも何か

がせまって来るように感じるからである

いよいよのぼり始める前に、楠田はふと思いついて、駅前前列並んでいるさびしい商店街のそば屋に入って、天井を一つ注文した。朝おきてから何も食べないままに、弁当一つ持たずに家を出てしまったことを思い出したからである。

井が運ばれて来る間、彼は、開け放たれた店の入口から、これからのぼろうとしている山を見ていた。山というより、丘か台地といったほうがいいかも知れない。これだけ近くなると全山が或る部分は雑木で、或る部分は杉におおわれているのがよく見えた。

つけ味のあくどい井飯を食べてから、楠田はボストン・バッグを一つ下げて歩き出した。間もなく途中で道を右に折れる。右側に桑畑、左側に農家がつづいている、柿の実が色づく頃にはどんなにきれいだろう、というような、静かな村を通りぬけた時、子供と犬だけが、見馴れぬ彼の姿に好奇の眼を向けた。

間もなくS岳登山口という道標がたっていた。それから道は、うす黒く、朽ちた葉の匂いにみちた、しめっぽい杉林の中にすいこまれて行く。木樵の通る径のような細々とした脇道が、誘うように所々に見えていたが、彼はコース通りに歩き続けた。羊歯の葉の色が目にしみるようだった。その中に埋もれて苔むした小さなお地藏さんの堂がある。

時々、立ちどまって休んだり、タバコを一服したりしたので、二時間ほどかかって山の背に出た時——といっても、それはあたりの木の生え方が薄くなって来た、という形でしか気がつかないのだが——あたりの空気はぼんやりと明かるくなって来た。

本来なら、ここらあたりで、ほっと一息つきたいところだが、楠田は何故かさっぱりしなかった。何となく胸が悪く、歩くと脂汗が流れるくせに背中がうすら寒い。

それでも彼は、とうとう頂上まで辿り着き、そこで、ほんの少し吐いた。頭痛もひどく、腹具合がどうも只事でない。頂上の景色は殆んど見なかった。

天井の蝦にあたったのだ、と気がついたのはそれから間もなくであった。勇気をふるいおこして、ようやく山を下ってから今朝がたまで、頭痛と悪寒と吐き気に苦しみながら過した一晚は、全く悪夢とよりほかに言いようがない。

それだけに症状がおさまってしまうと、気分はけろりとして只どこことなく体がだるいだけで、アパートの連中が出勤する頃、入れ違いに彼はタクシーにもならず、自分の足でさっさとアパートに帰って来たのだった。

2

半分仮病のような、そうでもないような、こういう欠勤は、甘い、心たのしいものである。しかし、彼は十時頃になって、正美順子からの電話を受けとった。

「どうしたの？ 病気ですって？」

「うん、会社へ電話をかけたのか？」

「そうよ」

正美順子は、楠田の婚約者ということになっていた。もっともそう言ってひろめているのは楠田ではなく順子のほうである。昔は世間的な結納のようなものが、婚約の絶対的効力を持っていたが、今はそうではない。日々刻々、男女がお互いに相手に負わせる心理的負債の量がその効力になる、と楠田は思っていた。だから、楠田は正美順子に親切にはしていたが、相手に対してのっぴきならないようなことはしていない。結婚というものは、いつでも出来る代り、いつでもやめられるようにしておきたい。正美順子の手にした鎖につなぎとめられるのは、最後の瞬間にしたいのだ。もちろん楠田は順子にひかれてはいるが、順子がこの世で只一人の女とは考えていないのであった。

順子は京橋デパートの貴金属売場にいる。売場にはいつも、^{ひとけ}人氣が少い。宝石というものの、冷たい品のようなものの中にあって、順子のはっとするほど綺麗だと思ふことがよくあった。順子はもう二十五になっている。デパートに入ってから六年目であった。六年間の疲労と六年間に得た世間智が、彼女を単なる娘ではなくしている。

心も顔も、むきたての桃のようなすべすべとした娘という感じではない。熟れ切ったいちじくのように、ぶつぶつと、二十五になった女のかたくなさと、強さをひめている。なげやりなものと、正直で積極的なB.Gらしい職業的態度とが、こんぜんとくっ合っている。

残酷な言い方をすれば、順子は本当に娘であるかなくに拘らず、手ずれた女であった。しかし楠田にはそこがまた魅力だった。首に鎖をつけられずにつき合える女というのは、こういうタイプの女以外にありえない。

「今日夕方、一緒に出かけられるかと思って確かめに会社へ電話したら、病氣だって言うから」

「昨日、山へ歩きに行つて食あたりしたんだ」

「へえ」

「だけど下らんことで、あんまり会社へ電話するなよ」

「だけどほつておいたら、あなたはいつ迄たつても何も連絡してくれやしないじゃないの」

デパートは月曜が休み、楠田の会社は無論日曜休日である。このかけ違った休みが、二人をともに順子の方をいらいらさせた。楠田は日曜になると、さっさと一人でハイキングや釣に行き、月曜になると、会社の帰りに順子と遊ぶにしても、翌日の勤めを思つて、夜も早く帰ろうとする。不実なのではないが、楠田の冷たさのようなものが順子の恋しさをかきたてる燃料になっているのも皮肉だった。

「とにかく、これから、あなたのところへ行くわ」

と順子に押されて、楠田は電話を切った。

順子は一時間ほどで見舞の林檎をもつてやつて来た。

「蝦にあたったなんて。気がつかなかったの？ 食べる時」

「ちょっと新しくはないなと思つたけど、それ位の奴なら今までにだって食べて何でもなかったから」

「それでどうしたの？」

「予定通りのコースを下りて来たんだけど」

彼は、そこで、ちょっとためらってから、

「東京まで帰る気力がなかったから、駅前の小さな宿屋に泊ってしまった」

と何気なく言った。

「ひとりで行くからバチがあたったのよ」

「僕はハイキングはひとりがいいいんだ」

「私と結婚しても？」

「そうだなあ、たまには一緒でもいいけど、時にはひとりになりたいなあ。その代り、君も、僕にはかまわず、自分のつき合いをしてもかまわないぜ」

順子の顔が突然、固くなった。

「昇さん」

順子は、楠田の手を握りしめ、近々と寝たままの楠田の胸に顔をよせながら言った。

「私のどこが気にいらないの？ あなたは私に何を求めているの？」

楠田は、寄せられた順子の顔を当惑したように眺めた。それは美しい顔ではあったが、目が大きくすぎ、この大きな眼のぎよついた顔を一生見て過さねばならないことは、何となく一生脂っこい支那料理を食って過せと言われているような気がした。

それでも、楠田はその気持をあらわに相手に伝えるようなことはしなかった。自分の心をみせつけてもいいのは、男、それも自分と利害関係のない男に対してだけである。女は悪意を見せるに値する生物ではなかった。女には只優しさだけが必要だった。女はどう考えても犬に似ている。

楠田は目の前にさし出された順子の顔を抱き、その髪を優しく撫でた。楠田は自分では動物を飼う趣味はなかったが、犬を飼っている人たちは、もっともっと愛情こまやかに、あのけむくじやらの動物に愛の仕草をすることを思ひ出すと、順子の頬を両手でひき寄せその唇を吸った。順子の体の重みが、しなやかにくずれて、彼の胸に感じられた。もっとも吸う力は、順子の方が強かった。

「あなたがほしければ、私、何でもあなたにあげる」

順子は楠田の耳に囁いた。

長い接吻が終った時、順子は楠田のより積極的な行動を期待していたのかも知れなかった。しかし彼は娘の手を放し、大儀そうに、そしていくらか言いわけがましく言った。

「一緒に遊びに行けなくてすまないね。今日はまだ、とてもその気にならないんだ」

順子が帰って行ったのは、三時頃である。彼女はアイスショウの切符を用意していて、楠田が行けないならば、誰か女の友達とでも行くように手配しなければならぬ、と言った。女というのは何とつましいものだろう。楽しみのために切符を買うというよりも、切符を買ったからには、どうしてもショウをみなければならぬのであって、命の危険をおかしてでも行きかねない有様である。

「そんなに私と一緒にいかないんなら、どこかで別の男の子を拾っちゃうかもしれないわよ」と順子は出がけに楠田をおどかした。

「ああ、そうしたいなら、そうしてくれよ。俺もその方が気が楽でたすかるよ」口まで出かかっ

た憎まれ口をようやくおさえて、楠田は、

「君にはそんなことは出来やしないよ」

と答えた。

「なめてるのね。安心すると危いわよ」

順子は楠田の言葉を一種の愛情の表現と解釈して満足していた。女を安心させることくらい、簡単なことはない、と楠田はもう一度心の中で皮肉に思った。

娘が出て行った後、楠田は静かさと同時に或る物足りなさを感じた。それはやはり、順子を愛しているからで、彼女がいなくなると、やはり気のぬけたような感じになるのだ。楠田はむしろ自分の心にそれを確かめたいような気持だった。

夕方六時頃になって、会社の友永ともながが見舞にやって来た。友永は両親を原爆で失った孤児として育ち、若いのに苦勞人で、病氣などときくと他人のことでもとうていほったらかしておけない性質だった。

「どうだ？ お粥でも煮てやろうか」

友永は楠田の枕元にどっかと坐ると人なつっこく微笑しながら言った。

「いや、いいんだ。今、僕の彼女が帰ったばかりなんだ。お粥ほしければ、彼女に煮させたよ」

「君らしくないなあ、痩せてはいるけど、病氣なんかしたことはないだろう？」

「うん」

楠田は答えてから、急に友永の顔をじつと見上げた。

「実は、昨日の夜、僕は不思議な経験をしたんだ」

友永は楠田の語気におされながら、何と言って返事をしていいのかわからないので、黙って楠田の顔を見返した。

「僕は、実は昨日下宿に帰らずに、見知らぬうちで介抱されて、今朝帰って来たんだよ」

楠田は心にほんの一瞬、順子には宿屋に泊ったと嘘をついたやましさを感じた。

「旅館を探して歩くだけの力がなかったものでね。あんまり人のいかないハイキング・コースで、タクシーなんてものもないし、医者も見当らないし、そのうちに陽がくれてしまった。僕は只、どこかに電話を借りるところはないかきこうとして一番近い家を目ざしてようやく歩いたんだ。何しろ、ひどい状態だったから」

「お化けか？」

「いいや、しかしそれに近いことかもしれない」

「話してくれよ」

友永は物静かに言って促すように楠田の顔を見た。

楠田が猛烈な腹痛とさむけと悪心をこらえながら辿りついたのは、一軒の草深い洋館であった。東京から二時間とへだたっていないのに、文化的な空気に置き忘れられたようなその村は、もっと遠く離れた地方よりも更にひなびているのに、その真只中に、昭和初年代の外観をもつ古びた、しかしがっしりとした洋風の建物が身の丈よりもっと高くのびた草の中に埋っていた。

彼が、その建物に向って歩いたのは、中に灯がついていて、確かに人のいる気配があったから

である。犬も吠えたような気がする。そして楠田は、鉄の飾りをうちつけたドアの前まで来た時に、昏倒した。気を失うほどではなかったが、一切の分別をもつだけの余裕はなかった。

物音をきいてひとりの女が現れた。女とわかる迄に、彼は何秒かかった。それほどその女は、女らしくない恰好をしていた。彼女は、古い男もののVシャツを着て砂糖袋をしたてなおしたものではないかと思うようなダブダブの茶色のスカートをはいていた。その姿はまさに乞食だった。髪はパーマネントもかけず、男のオールバックを、只少し長目にしただけのものである。

楠田は夢中だったが、それでも、どうやら事情を話したらしい。本当は女の顔や服装に気がついたのも、ずっと後になってからのことである。

「お入りなさい」

と女は言った。楠田はさし出された女の手に掴って立ち上った。楠田はふるえていた。女の掌は乾いていて温い。化物の手ではなかった。通された所は、古い洋風の家具が荒れるままにおいてある応接室である。楠田は女からソファの上にやすむように言われた。毛布が何枚か持つて来られて、彼はその中で不様にふるえていた。

彼はそれから、女の手から、何種類かの薬をのまされた。女の指先がしなやかで綺麗なのだが、その衣服からは異様な臭気がしたのだけは覚えてゐる。彼は間もなくひどく吐きくだし、それのようにやく危険は去ったような気がした。

そこ迄漕ぎつけるのに、夜半すぎまでかかった。遠くで飛行機の爆音が微かに聞えるだけの、音のない夜である。彼は初めて熱でぼっとなった眼で傍らの女を見上げた。自覚的な症状はも